

初秋のラスト・タンゴ

(2017年9月18日 @雑司ヶ谷「エル・チョコロ」)

齋藤 富士郎

LAST TANGO は 2010 年に東京都板橋区成増の小さなミュージックバー「Bar Nyarango (旧 On the Railroad)」のオーナー兼歌手のマヤンの伴奏楽団として誕生し、2011 年にタンゴ楽団として正式に発足した (<https://www.last-tango.net/profile>)。メンバーは

柴田菜穂：バイオリン

田ノ岡三郎：アコーディオン

江森孝之：ギター

西村直樹：ベース

マヤン：ボーカル

の四重奏団+歌手の編成である。今回のライブ

が結成以来 99 回目のライブであるという。

当日のプログラムは

第 1 部

Romance del Diablo (A. Piazzolla)

Last Tango (柴田菜穂)

Vals de Mayo (江森孝之)

Chiquilín de Bachín (A. Piazzolla – H. Ferrer) 歌:マヤン

Por Una Cabeza (C. Gardel – A. Le Pera) 歌:マヤン

Gallo Ciego (A. Bardi)

百万遍 (田ノ岡三郎)

第 2 部

Palomita Blanca (A. Aieta)

Ave María (A. Piazzolla) (イタリア語のタイトルは聞き取れなかった)

El Choclo (A. Villoldo)

El Último Cafe (H. Stamponi – C.Castillo) 歌:マヤン

Los Páaros Perdidos (A. Piazzolla – M. Trejo) 歌:マヤン

Fungo (西村直樹)

Tango Railroad (田ノ岡三郎)

アンコール

Nocturna (J. Plaza)



柴田菜穂



田ノ岡三郎



江森孝之



西村直樹

Adiós Muchachos (J. Sanders – C. Vedani) 歌：マヤン

で、ピアソラの作品とメンバーの自作品に少数の古典曲が含まれるという昨今のライブでは普通に見られるパターンである。ただ、他の楽団と異なる点は自作曲の取り扱いである。多くの楽団では自作曲を大体においてゆっくりしたテンポで、難しい編曲で、思い入れたっぷりに演奏するが多い。当人たちは大得意であろうが、それが常に聴衆を感動させるとは限らない。しかし今回のライブではいずれの自作曲も力のこもった演奏で大いに楽しめた。

全体的に演奏のテンポは速く、小気味よい。楽団の実際のリーダーが誰であるかは知らないが、演奏に関する限りバイオリンの柴田菜穂がリーダー役を果たしているように見え、中々の弾き手と睨んだ。田ノ岡三郎のアコーディオンもバンドネオンに比べて遜色のない力演であった。比較しては失礼かもしれないが、トリオ・ロス・ファンダンゴスのいわつなおこを西の横綱とすれば、田ノ岡三郎は東の横綱である。ベースは一般には縁の下の力持ち的役割であるが、西村直樹のベースは畳を破って縁の下から突き出るような勢いで、特に El choclo のソロは圧巻であった。ギターは江森孝之はあまり派手な動きはしなかったが、編曲面で楽団を支えているという紹介であった。歌手のマヤンはタンゴのみならず、様々なジャンルの歌曲を取り上げているということで、これ又、中々の歌い手であると睨んだ。しかしタンゴを他のジャンルの歌と同列に考えているならば、それには賛成できない。メルセデス・シモーネ、リベルタ・ラマルケ、カルロス・ガルデルなどのレコード/CD を日夜聴き込めば、更に得るところが多いであろう（すでに聴き込んでいるかもしれないが）。

筆者が LAST TANGO の演奏を初めて聴いたのは 2013 年の「東京タンゴ祭 2013」においてであった。しかしその時は、はっきり言って、余り強い印象は受けず、新しい楽団が出て来たくらいにしか思わなかった。しかし今回のライブを聴いて印象は一変した。LAST TANGO のこの 4 年間の演奏技術の進歩には目を見張った。それは何と言っても発足以来同じメンバーで 99 回のライブに至るまで活動を続けて来たことによると思う。この体制は今後もぜひ続けて欲しい。

LAST TANGO のもう一つの売りは柴田菜穂のトークではないか。兎に角よく喋る。喋りに関してはアストロリコの麻場利華と好一対に見えた。本人の言うところによると彼女も関西出身ということで成程と納得した。トークはやはり関西文化のお家芸で、東日本人の到底及ぶところではない。



マヤン

